

第8回研究大会・総会報告

2003年3月23日明治学院大学白金キャンパスで行われた第8回研究大会・総会の様子をまとめてみました。当日は総合司会の亀ヶ谷純一氏の進行で、午前の部に一般研究発表（10演題）を行った。午後の部はまず総会が開かれ、引き続きコミュニケーション・アゴラ（3題）、そしてシンポジウム「日本バレーボール再建へのシナリオ」をテーマに熱心に議論された。大会実行委員長の亀ヶ谷純一氏、事務局長の黒川貞生氏の多大なご尽力で活気に溢れた研究大会・総会を成功裏に終了することができた。

<シンポジウム>

シンポジウムは柏森康雄・黒川貞生両氏の司会によって進められた。シンポジストは堺ブレイザーズのゴードン・メイフォース監督、(株)フジテレビジョンスポーツ局スポーツ部制作担当部長並びにワールドカップバレーボール2003ゼネラル・プロデューサーの川口哲生氏、(財)日本バレーボール協会専務理事の砂田孝士氏の3名であった。

ゴードン・メイフォース監督には今年Vリーグで堺ブレイザーズを指揮された経験に基づき「日本と世界のバレーボールおよびそのコーチングの差異について」提言を頂いた。川口氏にはマスメディアの立場から「日本バレーボール再建へのマスメディアの貢献および提案等について」、砂田氏にはJVAの立場から「バレーボールの強化・普及に関する組織・システム等について」、それぞれご提言をいただいた。なお、通訳として河部誠一氏にご協力いただいた。

シンポジウムで提言された内容を簡潔にまとめ、また配布された資料を掲載して報告と致します。

(編集委員 高橋宏文)

日本と世界のバレーボールおよびそのコーチングの差異について

ーネクスト・ジェネレーション「前人未踏の地へ勇気を出して進もう」ー

堺ブレイザーズ監督：ゴードン・メイフォース氏

私は基本的に練習はじめに15分でアップを行わせるか、または開始後何分後には最大負荷がかかる練習になることを伝え、準備を行わせるようにしています。アメリカと日本の指導法の違いについて、よくアメリカはゲーム形式の練習が多いと思われるかもしれませんが、必ずしもそうとは言えません。私は堺ブレイザーズでの2日目の練習で不都合な出来事があり、ワンマンを行いました。基本的にはチームや個人の必要に応じて練習を工夫する必要があります。練習プログラムは10%をWarm-up, 30%をIndividual skill, 30%をComponent, そして残りの30%で6vs6などのゲーム形式の練習にあてています。

練習の組み立ては試合で勝利を収めた時に何が起きているのか、また敗退した時には何が起きているのかを統計的に分析することから始まります。収集するデータは、たとえばアタック、ブロック、サービスエース、相手のサーブミス、相手のアタックミス、相手のその他のミスが総得点に占める割合を分析します。これらからブラジルはブロックが少なく、逆にイタリアは多いことがわかったりします。他にはトスの配給割合などを収集しています。

次に、これまでの世界チャンピオンを年代ごとに大別してその特徴を考えてみると、70年代は日本が個人的スキル

を多量に反復練習して技術力を磨いて台頭しました。80年代はアメリカが組織されたチームスキルで、90年代は競争力のあるリーグを開催するようになったブラジルやイタリアなどの国が、そして2000年代は競争力のあるリーグに選手を送り込むだけでなく、他を圧倒するような能力を発揮する選手を保有したチームが台頭しています。したがって現在は、ジルソンのような特別なプレーヤーが必要にもなります。

コーチは勝利を収めるためにもっとデータを使うべきです。ブレイザーズはVリーグでサーブミスが多かったので、そこを修正したいと考えています。こうして、ゲームにおけるチームの分析を通して、練習がチームにマッチしているかを評価していくことが重要です。そのときに指標となるのがゲームのデータなのです。指標ということでは、ブレイザーズではある一定の速度以上のサーブを要求しています。そこでサーブ練習ではスピードガンを設置し、基準をクリアするまで打たせています。

最後に日本のコーチに必要なことは、プレーヤーにもっと考えさせなければならないと思います。ブレイザーズでも選手は言われたことをやるだけの傾向がありました。例えば、イタリアやブラジルが1990年代に行ったことで良かったのは、それまでとは異なるやり方の中で、プレーヤーに考えさせることをしたことでしょう。選手が自ら考え、自分からやらなければならないことをみつけ、また自分自身の意見が言えるようにならなければならないでしょう。

〈発表の抄録〉

1. アメリカと日本のトレーニングの違い

- A. 時間—アメリカの方が短時間に集中して行う。
アメリカでは基本的に4つのパートに分けられる。
10% ウォームアップ
30% 個人練習・ボールコントロール練習
30% 部分練習—例：
アタック対ブロック
3対6
ライブボックス／ブロックの反復練習
ディフェンスからトランジション
5対5
サーブレシーブからの攻撃
クイックとバックアタック
ブロッキングウェーブ
30% ウォッシュスタイルの6対6
サーブレシーブ／ライブ・フリーボール
ウォッシュ
0-0-1
25-8
サーブレシーブフリーボール／サーブ
- B. 練習は試合に勝つために何が必要か（統計）をベースに組立てる。
- C. アメリカは攻撃とブロックに特に時間をかける。日本ではディフェンスとレシーブに時間をかけがちである。
- D. 現在のバレーボールではサーブが大きな要素になっている。従ってスピードガンを使って選手のサーブを確認している。
- E. 主眼は日本のように指導者を頼るのではなく、選手がどのようにプレーするかを教えることと自分たち自身で考えることにおかれている。プレーをすればするほど経験をつみ、自分自身で調節することを学ばせる。
- F. アメリカチームは練習に加えてきつめのウエイトトレーニングを1週間に3～5日行う。

2. マーケティングとゲームの焦点

- A. 日本では約80%が女性である—成長のためには男の子や男性に試合会場に足を運んでもらわなければならない。観客の80%が女性のスポーツをマーケティングすることは困難である。スポンサーは社会全体にアピールできるスポーツを好む。競技人口の拡大だけでなく、スポーツそのものの成長を目指すべきである。
- B. バレーボールのレベルを高く保つためにはより多くの男の子にバレーボール選手になりたくなるようにしなければならない。
- C. 現代のスポーツはお金への依存度が高まっている。マイケルジョーダンやタイガーウッズは世界中で有名である。それは何故か？ お金である。もし日本でバレーボールを成長させたいならばお金に対して争わなければならない（それでも日本は他の国に比べ企業がバレーボールに多くのお金を出しているようである）。
- D. 敵は他のバレーボールチームではなく、サッカー、野球、ゴルフであり、そしてバスケットボールである。

3. プロチーム vs 実業団

- A. 現在日本ではVリーグはアマチュアの実業団リーグである。イタリアやブラジル、その他のトップリーグと比較しても、Vリーグは同じかそれ以上の費用をかけている。あたかもプロのように活動し、プロのように費用をかけている。しかし、自分たちをアマチュアと呼んでいる。
- B. それがTVへの露出やスポンサーからの協賛金の獲得、観客数に悪い影響を与えている。
- C. プロチームがナショナルチームを強くする。「日本のバレーボール界のためには全日本が強くなければならない」とよく耳にする。私はその考え方に同意しない。世界を見渡せばどのスポーツでもプロチームがナショナルチームを強くしていることがわかるだろう。日本のサッカーは強くなかったが、Jリーグができてから強くなった。同じ事がアメリカにも起こった。イタリアは世界で一番のリーグができるまでは有力チームではなかった。ブラジルも同じである。
- D. 時代に追いつこう。
1970年代日本は長時間練習と大量な反復により他を圧倒した。1980年代アメリカ男子と中国女子は、長時間練習の考え方に6対6やウォッシュドリルなどのアイデアを加え優位に立った。1990年代イタリアやブラジルのようにプロリーグの台頭を見た。そしてそれらの国がこの時代をリードすることになった。それは年間を通じて高い競技レベルと国際的な指導者や選手との切磋琢磨の結果である。2000年代は優秀な選手の時代であろう。多くの国の競争力が高まり、そしてレベルが接近してくる。それは多くの選手がイタリア、フランスでプレーをし、お互いに競い合う。その結果、お互いに慣れ、そのレベルでのゲームの戦い方を学ぶからである。従って、最もハードなトレーニングをしたところではなく、優秀な選手を多く抱えるチームが勝つようになるだろう（同じ事がバスケットボールでも起こっている。多くの外国人選手がNBAでプレーするようになってから、他の国のチームが強くなり、アメリカを脅かしている）。

4. 権力の分散

- C. 日本では日本バレーボール協会がバレーボールの全てを取り仕切っている。これまでのことを考えて、それが一番良い方法なのかを再考してみるべきである。
- D. アメリカではNBA、アメリカバレーボール協会、そして大学バスケットボールはそれぞれ独立している。それは、それぞれが別の目的を持っているからである。
NBAは試合に勝ち、儲けるためである。アメリカ協会と関わりがない。アメリカ協会はオリンピックに勝つことを目的として、プロリーグやNBAとは関係ない。大学バスケットボールは教育とNBAでプレーする選手の強化を目的とし、NBAやアメリカ協会の内部に対して関心を持たない。
- E. 変化を求めらるのであれば、それぞれが独立し、それぞれの目的に集中すべきである。現時点では日本バレーボール協会はどれも中途半端になっているように感じる。

日本バレーボール再建へのマスメディアの貢献
および提案等について

(株) フジテレビジョンスポーツ局スポーツ部
制作担当部長：川口 哲生氏

私はフジテレビに入社する前には音楽業界にいました。その後フジテレビに入社し、1995年にスポーツ局に配属され、99年のワールドカップからバレーボールとのかかわりが始まりました。

過去、日本のナショナルチームが強い時代は、バレーボール界はビジネス界と共に存在し大きな山を形成していたと思います。現在は資料の図のようにバレーボール界とビジネス界が2つの山に別れその距離が離れてきています。そのような状況の中でフジテレビはバレーボールを重要なソフトと考えています。フジテレビにはスポーツの5大ソフトに位置づけされているスポーツがあります。これらは野球、サッカー、格闘技、モータースポーツそしてバレーボールです。この中で野球と、サッカーは競合型ソフトのスポーツと言われ、他局と競合しあっているスポーツです。残りの3つは育成型ソフトのスポーツと言われ、フジテレビが独自に押しているスポーツです。しかし過去においては、バレーボールは競合型ソフトのスポーツに属していました。最近では格闘技のK-1が競合型ソフトのスポーツになってきています。フジテレビではバレーボールは育成型から競合型スポーツにしたいと考えています。育成だけで

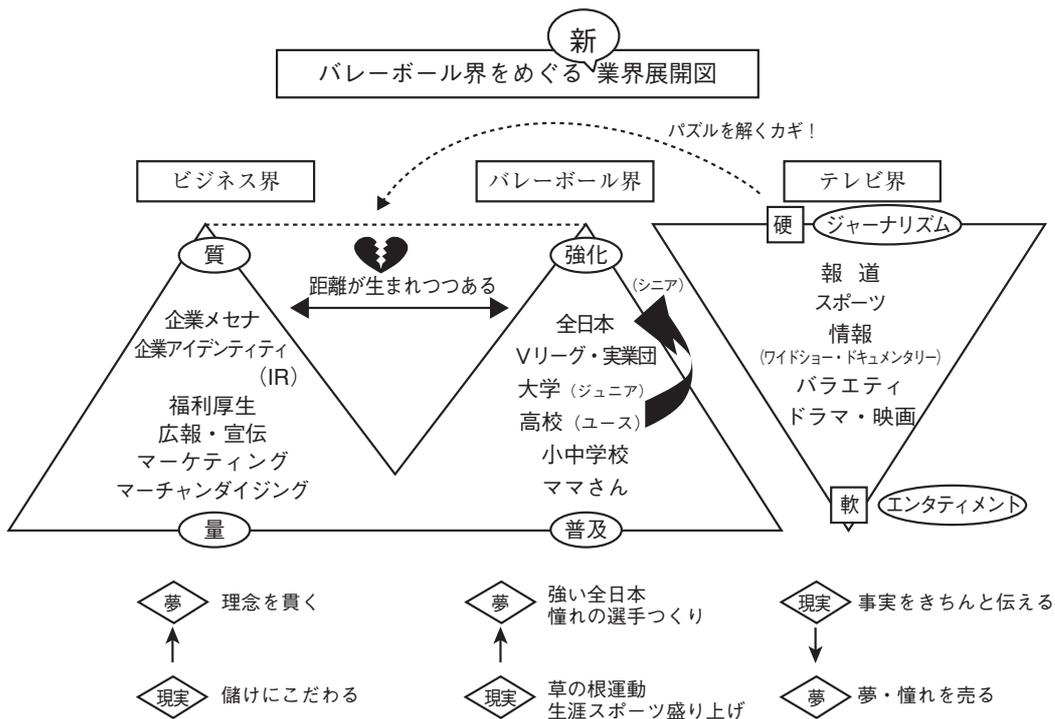
は投資の回収が難しいのです。

そこで、バレーボールを再建させるための方策を考えると、やはりビジネス界やテレビなどのマスメディア界をうまく利用し、これらの上にナショナルチームが充実し、強化され更なる山を築けるようになることだと考えています。やはり、ナショナルチームの強化が成功すれば、普及という山の裾野が広がります。我々フジテレビとしては、ビジネス界とバレーボール界の間を取り持つことができると考えています。そのためにナショナルチームは強くあるべきで、Vリーグには観客が多く入っているべきです。決して我々マスコミやテレビは主役にはなれません。しかし支援はできると考えています。以下の資料のようにバレーボールはテレビ向きのスポーツであることを自負してください。

①10代の若者の「見るのが好きなスポーツ」ベスト5
()内は%

1. プロサッカー (42.6%)
2. K1などの格闘技 (33.3%)
3. プロ野球 (31.3%)
4. 高校野球 (24.4%)
5. バレーボール (23.1%)

最後に、今秋11月、フジテレビはワールドカップバレーボールを放送します。是非、バレーボール関係者とフジテレビ関係者がスクラムを組んで努力し、試合会場が満員になるようにしたいものです。このことが、日本バレーボールの再建に役立つものであると確信しています。



バレーボールの強化・普及に関する組織・システム等について

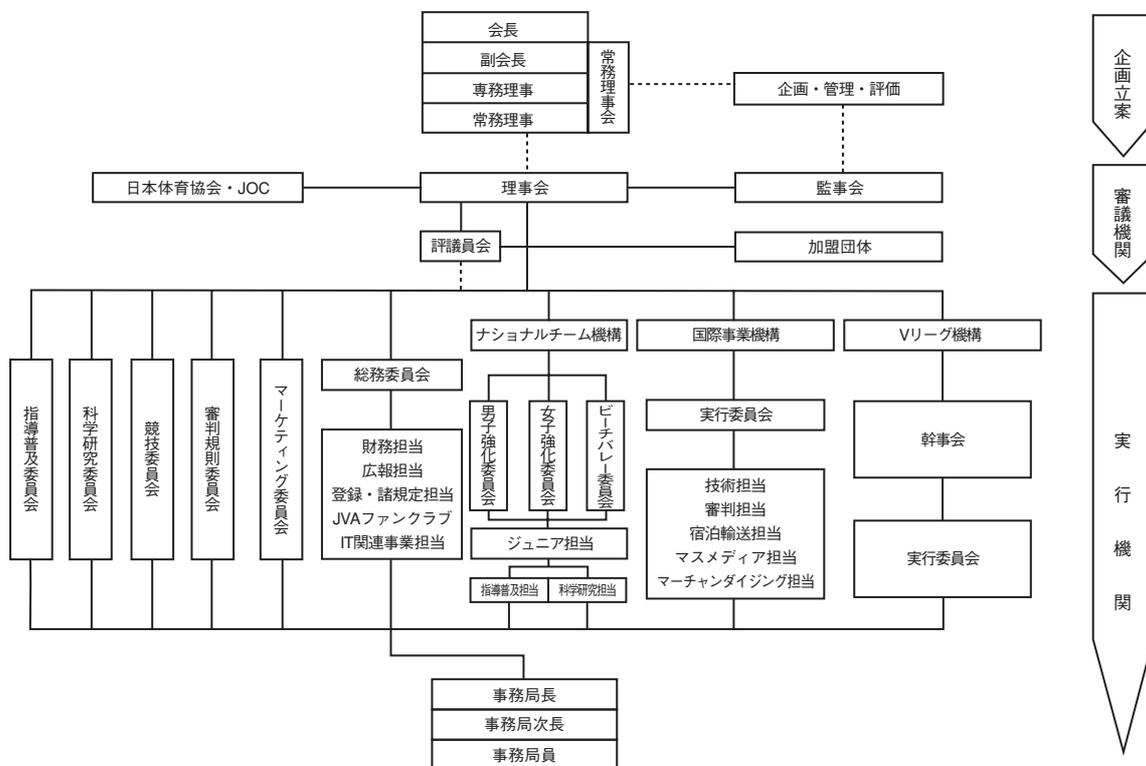
(財)日本バレーボール協会専務理事：砂田 孝士氏

勝つチームを作るということがJVAのひとの使命です。JVAではこの強化と普及ということを基本に活動を行っています。これまでのJVAの組織は本部制をとっていましたが、この組織形態は機能的でなかったため、強化が十分になされてこなかったように思います。まず、このような状況を改善し、ナショナルチームを再建したいと考えてい

ます。そのため、現在は広く意見を集める努力をしているところで、新年度からの新しい組織では、組織の機能を重視し強化や普及といった部分に成果が上がるように考えられています。

また、これまでは男子、女子、ビーチ(男女)、科学研究、ジュニアの5つの強化に関する委員会をまとめ、一貫指導の体制を含んだ組織にしたつもりでした。しかし、本部制を頂点とするこの組織は前述したとおり、実質機能していませんでした。したがって、この組織を撤廃し、強化委員会も平成15年度から資料のような新しい機能的な組織に改組しました。

平成15年度 財団法人日本バレーボール協会 運営組織図(案)



シンポジウム討論風景